私立赤星学園

報道部

風薙 真人

SHINTO KAZANAGI

目次

私立赤星学園報道部 3

あとがき 5 8

イラストレーション / 如月 由維

序章

足音が聞こえる。自分のものだけではない。他に、もうひとつ。

学校帰りの暗い夜道。街灯もまばらで人気も少ないこの道を、あたち なつき安達夏樹は早足で歩いていた。胸に、言い知れぬ恐怖を抱いて。

角を左に曲がる。すると、足音も同じ方向に向かってきた。今度は、急に立ち止まってみる。足音も止まった。ふたたび歩き出すと、また足音が聞こえてくる。

怖い。

ここ何日か、ずっとこんなことが続いている。夏樹は確信していた。ストーカーだ。テレビで何度か耳にしたことがある。あるニュース番組では、「行きすぎた愛情表現」と紹介されていた。それがまさか、自分が狙われるなんて。

振り返るなど、できなかった。自分を狙っている相手の顔を見る勇氣など、あるはずもない。恐怖に耐え切れず、夏樹は走り出した。あと角をふたつ曲がれば、自宅に着く。そうすれば安心できる。夏樹は走った。

家に飛び込みドアを閉めると、すぐに自分の部屋にこもった。母親が自分呼んだ気がしたが、耳に入らなかった。息が荒い。走ってきたこともそうだが、それよりも恐怖で足が震えている。

怖い。

どうして？ どうして私なの？ どうして

涙がこみあげてくる。今日はもう寝てしまおう。そう
思って、枕に顔をうずめる。ほどなくして、夏樹は深い
眠りに落ちた。

一章

千葉県北部、東京ディズニーランドにもほど近い位置に、その建物はある。

私立^{あかほしがくえん}赤星学園、通称・赤学。中高一貫・六年制教育を掲げるその学校は、中等部652名、高等部963名の生徒数を誇るマンモス校である。広大な敷地の東側が中等部校舎、西側が高等部校舎で、中等部には本館と新館が、高等部には東校舎と西校舎がそれぞれある。

高等部には、運動系・文化系合わせて32もの部活・サークルがある。その部活のなかで、野球部に次いで部費の高い部活。それが報道部である。

部室は西校舎の2階、その半分ほどを占めていた。部室の3分の1ほどは倉庫で、年に数回ある学校行事などで使うための放送設備や予備のカメラなどが、きちんと整理されて置かれていた。

報道部員は全部で31名。その31名を総括しているのが、報道部部长で3年の^{せとあきら}瀬戸陽、放送部門を^{はやま なお}葉山奈央、新聞部門は3年の^{あまの だいち}天野大地が仕切っている。報道部員は、校内では「プレス」と呼ばれ、部室は「プレスセンター」と呼ばれるが、長ったらしい呼び名を嫌う報道部の面々は、部室を単に「センター」と呼ぶ。そのため、大学受験を間近に控えた3年などの前で、うっかり「あとでセンターで」などと口走ったりすると、過敏に反応した生徒が発狂するとかしないとか。

そんな緊迫した空気が渦巻く東校舎3階。陽の在籍する3年D組の教室は、いつも通り騒がしい。何人かで集まって世間話をする者、トランプ^{とばく}賭博をしている者、

ウォークマンでお気に入りの音楽を聞く者。そんな中に混ざって、瀬戸陽は一人静かに読書をしていた。なんの変哲もないA6サイズの文庫本である。ただ一点を除いては。

「あー、いたいた。ぶちょー」

薄く茶色がかった髪を左右に束ねて揺らしながら、葉山奈央が陽のもとへ駆け寄ってくる。奈央は、赤学の生徒にしては珍しく制服をきっちり着こなし、余計な化粧などは一切してこない、正真正銘「清楚な」イメージの少女だ。

「あのさー、今度の体育祭、ミキサーは8チャンネルにする？それとも16にする？」

「そうだな、去年の教訓もあるから、ちょっと辛いけど16にしよう。本番で、またチャンネルが足りなくなるとマジ」

「はーい、りょおかーい」

一週間後に迫った体育祭の放送設備についての短いやりとりのあと、ふと陽の持っている文庫本に目をやった奈央は、妙な違和感を感じた。

「ぶちょーさあ、読書熱心なのはいいけど、やっぱりそのカバーはいただけないよ」

「ん、そうか？みんなそう言うんだよな。なんでだろ。けっこうイケてると思うんだが」

そう言った陽の持つ文庫本には、「ブックカバー」という文字とともに、かわいらしい少女のイラストが描かれている。どこからどう見ても、ロリッ娘のイラストだ。

「ぶちょーって、やっぱロリコンでしょ？」

「ありえない」

誰もが思いつくであろう、奈央が口にしたその質問を、陽は0.3秒で否定する。

「だいたいそれだったら、どうしてこんなマークが一緒に描いてあるんだ？」

陽のブックカバーには、円の中に赤い星が描かれたマークと一緒に描かれている。陽達の通う高校、赤星学園の校章だ。

「それ、あんま関係ないっしょ。だいたい誰がそんなの書いたの？まさかぶちょ - じゃないよね？」

「んなわけあるか。武田だよ、ラビリンスの」

ラビリンスというのは、赤学高等部にある小説サークルである。コミケなどにもしばしば出店しているらしい。

「やっぱりそっか。あいつしか描かないよね、そんなの」

「その前に、俺に絵心はない」

「そーだねー。ぶちょーの絵は、絵じゃなくて字だもんねー」

お前に言われたかねえ、という言葉が無理やり飲み込み、陽はふたたび活字に目を落とす。数行読み進んだところで、担任の中野の声が聞こえ、奈央は足早に自分の教室に戻っていった。

その日の放課後。

いつもどおりプレスセンターに現れた陽は、そこにいた招かれざる客を目にして、そして、引きつった。

「ハァーイ、アキラ。元気してた？」

混じりっけのないきれいな茶髪に、耳には小さなピアスが2つばかりきらめき、赤のタートルネックシャツにレザージャケット、下はジーパンという、どう考えてもこの場に似つかわしくない服装をした女性。

「...マコ先輩。なんでこんなところにいるんですか」

「失礼ね。いちゃいけないわけ？それと、私の名前は麻子あさこよ。野田麻子。マコじゃないって、何度言えば分かるワケ？」

「いいじゃないですか。長ったらしいの、嫌いだし」

「たった1文字しか変わらないじゃない」

「細かいことは気にしない」

「あんたがゆーな」

麻子の最後の一言を無視して、陽は空いている椅子のひとつに座る。

野田麻子は昨年赤星学園を卒業したOBで、現在は都内の某国立大学に通っている。高校時代は報道部に所属し、斬新なアイデアと奇抜な文章で、校内新聞を賑わせていた。彼女自身、報道記者を志していて、最近では新聞社の地方支社にもしばしば出入りしているらしい。

「だいたいマコ先輩。大学はどうしたんですか。今日は休日じゃないし土曜でもないから、講義は普通にあるはずですよ」

「マコじゃないっつーの。それと、今日は創立記念日で休みなのよ」

「そんなもんがあるんですか。てっきり高校までかと思ってたけど」

「伝統のある大学だからね。なんだかんだ言って、歴史を残したいんでしょ」

「そんなもんですかね」

「そんなもんなのよ」

ふと部室内を見まわした陽は、この部屋に陽と麻子以外、誰もいないことに気づく。

「...マコ先輩、どうやってこの部屋に入ったんですか？見たところ、誰もいないようだけど」

「ん？ああ、奈央っぺに似た女の子がね、入れてくれた

のよ」

「奈央に、似た？」

「そう。見た目は奈央っぺそっくりだから、最初は奈央っぺかと思ったんだけど、それにしちゃーおとなしすぎるし、なんかおどおどしてて奈央っぺらしくなかった」

「奈央に似てて、おとなしい...？ああ、牡丹^{ぼたん}ちゃんか」

「誰よ、それ？」

「奈央の妹ですよ。今年入学してきた一年生です。マコ先輩が知らないのも無理ないですね」

「...ちょっと待って。あたしが会ったのは奈央っぺじゃなくて、奈央っぺの妹で、それがまだ一年生で、それであたしが知らなくても無理ない？」

「そうです」

「じゃああれは奈央っぺじゃないんだ」

「さっきからそう言ってるじゃないですか」

こんなんでもよく国立大なんかに合格できたな、と陽は思う。麻子は、ちょっとしたことで、すぐに頭がパニック状態になってしまうのだ。それが大抵はどうでもいいことで、重要なことはきっちり整理されているから、わからない。

と、ドアが開いて話題の人物が入ってきた。

「あ、瀬戸さん。こんにちは」

自販機で買ってきたらしいジュースの紙カップを両手に持って、奈央によく似た小柄な少女が部室に入ってくる。

「やー、牡丹ちゃん。あいかかわらず早いね」

「ホームルーム終わるのが早いですから。それより瀬戸さん。そちらの方、どなたですか？報道部のOBだっておっしゃるから中に入れたんですが」

素性のよくわからない人物を部室に入れるという、いかにも牡丹らしくらぬ行為に、もしやという小さな疑念を

抱きつつも、今は質問に答えるのが先と、陽は判断した。

「紹介するね。うちのOBの野田マコ先輩。マコ先輩、彼女が、例の奈央の妹です」

「なー。よく似てるわねえ。牡丹ちゃん、だっけ？以後よろしく」

「あ、はい。こちらこそよろしくおねがいします」

「ところで牡丹ちゃん、そのカップ、どうした？」

陽に言われて、牡丹ははじめて、自分が両手にカップを持ったままドアの前に突っ立っていたことに気づく。あわてて右手のカップを麻子に渡ししながら、

「お客さまにはお茶をお出ししなければと思って、今買ってきたんです。あ、瀬戸さんののも買ってきましょうか？」

「あ、いーよいーよ。俺は今朝買ったペットボトルがまだ残ってるから」

わかりました、という小さな返事を確認してから、陽は机の中の書類を引っ張り出し、机にあるパソコンを立ち上げる。パソコンの起動音に重なって、あっつ、という牡丹の声が聞こえたような気がしないでもないが、とりあえず気にしないことにする。

パソコンの画面から「体育祭設備配置計画書」というファイルを呼び出して、書類とパソコンの画面を見比べると、部屋のドアが開いて、一人の男子が入ってきた。陽がしたのと同じように、ドアの前に突っ立って絶句している。彼の視線の先にはもちろん

「やっほー、ダイチ。おっひさー」

「何、やってんすか、マコ先輩...」

ほぼ予想通りの展開に、陽は、やっぱりこの人はいないほうがいい、と思いながら、あいかわらず目を丸くして突っ立っている天野大地に説明する。

「大学が創立記念日で、暇だから遊びに来たんだとさ」
非常に簡単な説明で状況のほとんどをのみこんだ大地は
小さく、来るなよ...、と嘆息する。

大地にとって、麻子との思い出はあまり良いものではない。昨年、新聞部門のチーフとサブチーフの間柄だった麻子と大地は、それこそ色々な場所に取材に行った。山を登り、野を駆け、一日の移動距離が30kmを超えることなどざらにあった。そのほとんどで、大地は麻子のあとを追っかけていた、もとい引きずりまわされていたのだ。

麻子を目の前にして、その嫌な思い出が大地の頭によみがえらないはずなどない。

なるべく麻子の姿を視界に入れないようにしながら、大地は自らの指定席へと腰を下ろして、鞆と机から膨大な量の紙を取りだす。校内新聞「AGプレス」の紙面原稿だ。

「うわ、こりやまたすごい量だねえ。これ全部に目を通すのは、やっぱり大変よねえ。新聞チーフの宿命ってヤツ」
励ましも^{けな}貶しもとれる麻子の科白^{せりふ}を無視し、大地は目の前のパソコンの電源を入れ、「AGP0109」というファイルを開く。文面は、ほとんど完成状態だった。

「追加原稿ですか？何かあれば、手伝いますよ」
いつも通り手伝いを申し出る牡丹に、やさしく微笑みかけながら、

「ありがとう。これから最終校正なんだ。だから、これは僕の仕事。いつもいつも悪いね」

そんなことないです、という牡丹の言葉に、ふたたびやさしく微笑んで、大地はパソコンの画面を凝視する。ほどなくして、陽のパソコンが音を出す。

「早いな。もう終わったのか？」

「ほとんど終わってたんだ。今は、最後の記事を校正しただけだからな。印刷、よろしく」

「あいよ。明日にはあがるだろ」

プレスセンター
報道部室にあるパソコンは全てLANで接続され、情報のやりとりが簡単に出来る。しかし、プリンタに接続しているのは、部長である陽のパソコンだけで、大地は紙面が出来あがると陽のパソコンにデータを転送し、印刷を依頼するのだ。

データの転送を終えた大地は、またもや鞆の中から分厚い紙の束を取り出して読み始めた。

「大地先輩、なんですか、それ？」

こう見えて、牡丹は意外と好奇心が強い。今も、大地がもつ紙の束を、興味津々といったかんじで覗きこんでいる。紙面に並べられた文字は、日本に古来からある文字ではない。大英帝国を発祥とする『アルファベット』と呼ばれる文字形態。牡丹の苦手な英語だった。

「論文。って言ってもそんなにたいしたものじゃなくて、英語の授業の課題なんだよ」

大地たち3年の英語の授業では、年末になると小論文の課題が出される。もちろん英論文だ。

「ふーん。英語はよく分からないです。何が書いてあるんですか？」

「日本競馬の国際化に関する論文だね。ヨーロッパやアメリカの競馬と比較して、これからの国際化の流れに乗り遅れないように、日本が今何をしなければならないかがこと細かにかかれてる。すごい文章だよ。相当英語に精通してて、競馬に関しても興味持ってなけりゃここまで書けないよ」

「また競馬か。本当に好きだな、大地は」

「あくまでスポーツとして、だ。ギャンブルとしては認

識してないからな。好きな馬を応援したり、そういうのが好きなんだよ」

実は、大地はかなりの競馬好きである。だが彼の言葉通り、競馬場に行って馬券を買ってくるということは一切しない。それでいて、インターネット上で開催されているいくつもの^{ボグ}POGに参加しているのだから、よくわからない。部室に飾られているスペシャルウィーク²のポスターも大地が貼ったものだ。

「論文のテーマは何にしたんだ？」

「天皇賞とクラシック³のマル外⁴開放についてにしよ
うかと思ってる。そういう面では、この論文は参考になるしな。お前はどするんだ？」

「通信産業についてだ。無線・有線含めてな。そっち関係には興味あるし」

そこで、今までパソコンの画面を凝視していた陽が顔を上げた。

「大地、載せてないのか、ストーカーのこと」

「ん、ああ。迷ったんだが、本人から正式な了承も得ないしな。この件に関しては、俺たちの取材能力を生かして情報を集めている。これからも続けていくよ」

「そうしてくれ。この件は、どうも放っておけない。先生にも言わず、警察にも相手にされずに、俺たちに伝えてきたんだ。俺たちがなんとかするしかない」

POG...ペーパー・オーナー・ゲーム。デビュー前の競走馬を自分の所有馬と仮定して指名し、その成績によって勝敗を決定するゲーム。

² スペシャルウィーク...競走馬、現在は種牡馬。98年の日本ダービーを武豊騎乗で制覇。その後99年に春秋天皇賞、ジャパンカップを制覇。

³ クラシック...皐月賞・東京優駿・菊花賞・桜花賞・優駿牝馬を指す。

⁴ マル外...外国産馬。「外国で生産され、外国での出走経験のない馬」と規定される。

「わかってる。最大限の努力はするよ」

「ああ、頼む」

そう言って、陽はふたたび設備計画書の画面を呼び出して、編集を始める。

安達夏樹と名乗る少女が報道部室に現れたのは、3週間ほど前だ。部外者のあまり来ないこの部屋に人が来るのは珍しいので何事かと思ったが、彼女の表情は深刻そのものだった。相談したいことがある、このことは誰にも言わないでほしいと前置きして、彼女はこう言った。

「私、ストーキングされてるんです」

陽は、耳を疑った。ストーキングというのは、現在ではストーカー規正法によって立派に刑事事件として成立する。相談するなら、自分たちではなく警察に行くのが妥当な手段だ。

「警察には何度か行ったんです。でも、目に見える証拠がないから、って相手にしてもらえなくて。そんなのあるはずなのに。それで、普段から調べることには慣れてるだろうと思って、ここに来たんです」

警察が調べてくれないのなら、その他の機関にゆだねるしかない。が、一介の学生である夏樹に、探偵を雇うほどの経済的余裕があるはずもないし、先生たちに言っても対した調査ができないことくらいは、陽にも容易に想像出来た。

しかし、どうも腑に落ちない。誰にも言う必要がない、というならともかく、彼女は「誰にも言わないで欲しい」と言ってきたのだ。それはすなわち、他人にこのことが知られるのを恐れていることになる。調査の合理性の点から、陽は校内新聞に記事を載せて、学校全体に協力を要請することを勧めたのだが、

「ストーカーに狙われてるなんて友達に知られたら、み

んな離れていきます。私、元々友達少ないほうだし、だから今の友達を大切にしたい。こんなことで、友達をなくしたくないんです」

それを聞き、夏樹の胸中を察して、陽はそれ以上詮索しなかった。事情は飲み込めた、部員全体で相談してから最終的な結論を下すと言って、陽は夏樹を帰した。

新聞部門のチーフである大地は、すぐに了承した。が、情報の拡散を防ぐため、自分を含めて3人以内で調査すること、それ以外にはこの件に関する一切をふせておくことを、条件として提示した。陽は承諾した。大地はメンバーとして、自分と牡丹、それに陽を指名した。本来取材活動に出ることのない陽は、それを聞いて驚きを隠せなかったが、何分緊急事態であることを考慮して引き受けた。

それから2週間。大地と陽が交代で、夏樹と一緒に帰宅しつづけたのだが、ストーカーは全く現れなかった。男が一緒だとダメかと思い、多少不安があったが、牡丹を向かわせたのだ。その翌日。

「いました、確かに。ストーカーが」

牡丹ははっきりとそう言った。その日は、牡丹の安全を考えて、夏樹の両親が泊めてくれたのだという。

しかし、それだけだった。それから1週間が過ぎた今でも、ストーカーの名前どころか、顔すらもわかっていない。牡丹が何度か写真を撮ろうと試みたのだが、すぐに逃げられてしまう。

加えて、体育祭が近くなっていることもあって、部長の陽はあまり調査に参加できていなかった。5日ほど前から、大地と牡丹の2人で調査を続けている。たった2人では、満足のいく調査が出来るはずもない。調査は暗礁に乗り上げていた。

これからどうするべきか。本格的な調査に参加できない分、違う何かで2人をバックアップしなければならない。どうするべきか

そんなことを考えていたとき、麻子が急に立ち上がった。何も言わずにドアへと向かう。

「マコ先輩？急にどうしたんですか？」

「今日は帰るわ」

「へ？」

「重要な用件で会議でもするんでしょ？そんな雰囲気だから。他人の取材内容を盗み聞きするほど、趣味は悪くないわよ。じゃね」

ドアが閉まる。なんだかんだ言って、麻子も元報道部員だ。依頼人の守秘義務クライアントくらいはわかっているのだ。そんな麻子に感謝しつつ、陽は口を開いた。

「この先、どうする？いつまでも立ち止まってても、ラチあかねえだろ」

「そうですよね…。昨日もつけられたって言ってましたし」

「陽が復帰できるのは体育祭明けになるよな。あと1週間か。心配だな」

「すまない。嫌な時期に重なっちゃったな」

「仕方ないですよ、仕事ですから。部長はとりあえず、部長の仕事をまっ全うしてください」

「ありがとう牡丹ちゃん」

「いいえ。それまでは大地先輩と2人でがんばります」
そう言った牡丹の頬は、なぜかほんのり赤くなっている。

「体育祭が終わって陽がフリーになったら、3人で彼女をマークしてみよう。それでヤツが現れればとっ捕まえる。現れなければ他の手を考える」

「わかった。それまでは2人が彼女についててくれ。大

地はなるべくいたほうがいいな。頼めるか？」

「もちろん。牡丹ちゃんはどうする？一緒に来るか？」

「あ、はい。あ、でもどうしようかな。帰り道が怖いかも...」

「俺が牡丹ちゃんを送っていけば問題ないだろ。な、陽」

「牡丹ちゃんさえよければな。人数は多いほうが良いのは事実だし」

「わかりました。じゃあ、お願いします」

「了解。1週間は我慢だな。彼女も、俺たちも」

どうせなら瀬戸さんがよかったな、などと思いつつ、牡丹は、そうですね...、とうなずく。

時計の針が6時を回ったのを見て、陽はAGプレスの原稿を印刷にかけてから立ちあがる。大地と牡丹も立ちあがり、部室をあとにする。窓の外には、うっすらと夕闇が広がり始めていた。

二章

その日、夏樹は1人だった。陽と一緒に帰れないのは前から知っていたが、体育祭が近づくとつれ、大地や牡丹も忙しくなり、これから3日間は夏樹1人で帰らなければならない。大地と牡丹は「本当に申し訳ない。本当はついていてあげたいんだけど」と、しきりに謝っていた。3日くらいなら大丈夫だろうと思ったのだが、いざ1人になってみると、やっぱり怖い。以前の恐怖がよみがえって来る。数日たてば、という思いが、いくらか恐怖を和らげてはいるが、それも気休め程度にしかならなかった。

まだ足音はしない。今日は来ないのか。来ないなら、それでいい。そのほうがいい。このまま無事に家に帰りつきたい。そんな思いが頭をめぐっていたときだ。

コツ。

革靴が地面に当たる音。夏樹の心臓が、ドクン、と波打った。

コツ、コツ、コツ。

音が近づいてくる。恐怖が、一気に大きくなる。胸の鼓動が、どんどん速くなっていく。それに合わせるかのように、歩調も速くなる。

コツコツコツコツ。

聞こえてくる足音も速くなった。自分の足音の間隔と

もう1つの足音の間隔が、ほとんど同じに聞こえる。

信じられない。こんなときに、来るなんて。

足音が大きくなってきた。距離が縮まっている。それを頭で理解したそのとき。肩を、つかまれた。夏樹の心臓が、ふたたび大きく波打つ。

「イヤッ」

反射的にその手を振り払って、夏樹は走り出した。昼間の雨でできた水溜りに足を突っ込んで、右足がずぶ濡れになったが、そんなことは気にも留めなかった。夏樹の心は今、恐怖で埋め尽くされている。

自宅までの長い道のりを全力疾走して、夏樹は玄関に飛び込んだ。そのまま崩れ落ちる。目には涙が浮かんでいた。革靴の音が、頭の中で繰り返しよみがえる。肩には、つかまれた感触が生々しく残っている。それでも時間がたつにつれ、徐々に冷静さを取り戻していった。

今になって考えてみれば、足音はあれから追ってきていなかった。あのあとすぐに角を2つばかり曲がったので、見失ったのだろうか。

母親の呼びかけも意に介さず、自分の部屋へ向かう。鏡を見ると、恐怖におびえた顔に涙を浮かべる自分がいた。

どうして、どうして私ばかりこんなめに

声にならない声を出して、夏樹は本当に泣き出す。涙はとめどなくあふれてくる。髪の毛はぐちゃぐちゃに振り乱され、着ている制服にはところどころ泥がはねている。右足に履いたソックスは、泥水で真っ黒になっていた。

早く寝てしまおうと思って、枕に顔をうずめてみる。

しかし、一向に眠れなかった。あの恐怖が、頭から離れ

ない。

どれくらいの時間が経過しただろう。実際はそんなに経っていないかもしれない。そんなとき、夏樹はようやく眠りに落ちた。深い深い、眠りに落ちた。

翌日、夏樹は学校に現れなかった。中学時代から無遅刻無欠席無早退だったという彼女の姿が見えないことを不審に思った牡丹は、昼休みにそのことを陽と大地に報告し、学校が終わってから夏樹の家を訪ねることを提案した。

「俺達にも仕事があるからなあ。訪ねるにしても、何時になるか分からないよ」

「それでもいいんです。もしかしたら、昨日の帰り道で何かあったのかもしれない。もしそうなら、そのことは絶対聞いておかないといけないと思うんです」

「確かにな。ストーカー事件に関わることなら、絶対に聞き出しておくべきだ。情報は多いほうがいい。そうだと、陽？」

陽は少々悩んでいた。自分に課せられた仕事は、あまりにも多い。実際、時間がいくらあっても足りないほどに。しかし、学校を休んでしまうほど重大なことが彼女の身に起こったとすれば、それこそ放っておけない。果たして、どちらを優先するべきか。

「陽が行けないなら、俺と牡丹ちゃんの二人で行っても構わないぜ？」

大地の一言が、余計に陽を悩ませる。散々悩んだ拳句^{あげく}、陽は結論を出した。

「いや、俺も行こう。もともと依頼を受けたのは俺だし

な。仕事を理由に何もしないのは、やっぱりよくない。今回だけでも、話を聞いておこうと思う」
牡丹の表情が必要以上に明るくなったような気がしたが、とりあえず考えないことにしておく。

「わかった。けど、仕事は何時に終わる？かなり遅くなるだろ」

「まあな。それでも、なるべく早く終わりにするさ。どうしても間に合わなければ、途中で切り上げてもいい」
結局、放課後終了ギリギリの6時半に昇降口でおちあうことにして、それぞれの教室に戻った。

陽は、机の上においてあった文庫本を開いて、読み始める。カバーには相変わらず、かわいらしい少女の絵が描かれていた。

「うそ...っ」

驚きを寸分隠さず、牡丹の声がつかまる。

予定通りの時間に集合したあと、3人は夏樹の家に来ていた。既に帰宅していた夏樹の両親に軽く挨拶し、そのままこの夏樹の部屋に直行したのだ。牡丹がひととおりの事情説明　なぜ自分たちがここに来たのか　を終え、単刀直入に欠席理由を尋ねたのだ。

「帰り道が怖いから、学校に行きたくないんです」
夏樹はそう言って、昨晚の出来事を洗いざらい話した。夜道がいつも通り静かだったこと、突然足音が聞こえたこと、それがだんだん近づいてきて、最後には肩をつかまれたこと。

夏樹が話している間、3人は黙りこくったままだった。ただ一言、牡丹の驚きの声を除いては。

「今朝、外が明るくなって目を覚まして、泥だらけの制服が目につつて、そうしたら昨日のことが一気によみがえってきて、恐くなって、それで、学校に行きたくなくなつて…」

夏樹は、そこで声をつまらせた。そのあとには、小さな^{おえつ}嗚咽が聞こえてくる。牡丹が夏樹をなだめ、陽と大地は顔を見合わせる。会話はない。言葉を発しなくても、夏樹がいかに恐ろしい体験をしたかということは2人ともわかっている。2人の表情は険しかった。驚きと焦りが同時に滲み出ている。牡丹は目に涙を浮かべていた。

静まり返った部屋に、夏樹の泣く声だけがむなしく響いていた。

事態は想像以上に深刻になってしまった。夏樹がストーカーから直接的な被害を受けたことで、彼女は通学ばかりでなく、外出そのものをしないようになってしまったらしい。今日も学校には出席せず、1人で部屋にこもりっきりだという。

しかし、相変わらず手がかりはない。見つかっていないだけでなく、体育祭を明日に控えた陽達3人は、調査活動を全く行うことができないのだ。動けるようになるのは2日後。体育祭終了の翌日からだ。つまり、今日と明日は調査の進展は期待できない。しかしその間にも夏樹の恐怖は増すばかりだ。陽はふたたび悩んでいた。

昼休みになって、3 - Dの教室に牡丹がやってきた。3年ではありえない低い身長の子の登場に、教室中の視線が集まっている。牡丹はそんな視線に構うことなく、陽のもとへと歩を進めた。

「瀬戸さん、今日も夏樹ちゃんのところに行きませんか？」

牡丹にしては、やけにはっきりとしたものの言い様に、陽は一瞬たじろぐ。

「昨日の様子を見てると、やっぱり心配なんです。それに1人で部屋にいるみたいだし、やっぱり誰かが一緒にいたほうがいいと思うんです。一日中一緒っていうわけにはいかないですから、せめて学校が終わった後の短い時間だけでも、と思ったんですが」

一息二息で言いきって、牡丹は軽く深呼吸する。普通の牡丹からは想像もできない口調に、陽はあっけにとられていた。

聞けば、夏樹の両親には既に了解を取っているという。電話をしたときに夏樹の母親は「今はあなたたちだけがあの子の支えです。どうかよろしくお願いします」と、少なからず涙声だったらしい。そんなこともあって、牡丹は、陽が行かなくても自分だけでも行くつもりらしい。

「大地は、何て言ってる？」

「さっき行ったら、『無理だ』って即答されました」

陽は、あっちゃ～、と頭を抱える。これでは、牡丹のガード役をみすみす押しつけられたようなものだ。かといって、牡丹1人であの暗い道を歩かせるわけにもいかない。

「...何時になるか、分からないよ？」

「それでもいいです。来てくださるなら、それだけで。夏樹ちゃんも喜ぶと思いますし」

自分にほとんど選択の余地がないことを自覚しながら、

陽は^{しぶしぶ}渋々といったかんじで了承した。牡丹はそれを聞くと飛びあがって喜び、ありがとうございます、と元気よく言って、スキップしながら教室をあとにした。

気がつけば、さっきまでの悩み事が頭からさっぱり消えている。人間ってわからないな、などど毒づきながら、鞆から文庫本を取り出して読み始めた。カバーには、未だに少女の絵が描かれていた。

放課後。陽は異常な忙しさの中で、苦しみもがいていた。

机に積まれた書類の山は、陽の頭と同じ高さほどまで積みあがっている。しかもそれが左右にあるのだから、たまったものではない。陽は、今日中にこれら全ての書類に目を通し、来るべき体育祭に備えて、報道部内の役割分担表や班編成表などの必要書類を全て作り上げなければならないのだ。時計は既に6時を回っている。牡丹には何時になるか分からないとは言ったものの、さすがに7時8時まで待たせておくわけにはいかない。

どうする。仕事は終わらせなければならない。だが牡丹が心配だ。どうする。

結局、陽が出した結論はこうだ。とにかく、ちゃっちゃと仕事を終わらせる。目標時刻、6時半。それを過ぎたら、あとは知らん。

ひどく投げやりな結論だとは分かっているけど、こうでも考えなければやっていけないと言い聞かせ、ふたたび書類に向かう。普段から本を読みなれていることが幸いして、書類に目を通すスピードがどんどん上がっていく。

時計は、6時12分を指していた。

「あ、瀬戸...さん？」

陽の足取りは非常に重かった。常人では考えられないほどのスピードで書類を読みとおし、普段の3倍近くの速さでキーボードを叩いたのだ。顔には、疲労の色が隠しきれない。

「やあ...お待たせ...」

そう言った口調にも、全く覇^は氣がない。

「大丈夫...なわけありませんよね。一体、何をしてたんですか？」

「いやなに、体育祭の準備だよ。必要な書類とか、全部作らないといけないしね」

そう言うやいなや、陽は牡丹の肩に手をつけて、ふう、と息を吐き出す。そのまましばらく動かない。無論、牡丹の頬が紅潮しているのを知る由^{よし}もない。

「あ、あの、瀬戸さん、そろそろ、行きませんか...？」
牡丹に言われて、陽は顔を上げる。目がうつろだ。

どうやら、短いながらも寝ていたらしい。

「あの、無理しなくでもいいですよ。疲れているなら、家に帰って休んだほうがいいですし」

陽は黙って首を振る。そして、やはり無言で歩き出した。陽の家とは逆方向、夏樹の家のほうだ。校門に向かう陽を追って、牡丹も歩き出した。陽のすぐ横につく。かすかに高鳴る胸の鼓動に、牡丹は気づいていなかった。

「来て、くれたんだ」

夏樹の最初の一言はこれだった。もともと友人の少ない夏樹は、昨日から今日にかけてずっと1人だった。会い

に来たのは昨日の3人と、今日の2人だけ。つまりは陽達しか来ていないのだった。

夏樹は、陽と牡丹を自分の部屋にいるように促すと、キッチンからジュースのボトルとグラスを3つ、それに少々の菓子類を持ってきた。

「お待たせ」

そう言って夏樹も床に座り、グラスにジュースを注いでいく。その表情は、昨日とは打って変わって晴れやかだった。

「瀬戸さん？ どうしたんですか？ 顔色悪いですよ？」

やっぱりだめか、と陽は思う。疲労を隠して平静を装っていたつもりだったのだが、結局感づかれてしまった。牡丹といい夏樹といい、2人ともカンが鋭い。

「ついさっきまで仕事しててね。でも大丈夫。ちょっと忙しかっただけだから」

実際は『ちょっと』どころではなかったのだが、そんなことは口が裂けても言えるはずがない。が、夏樹は牡丹以上にカンが鋭かった。

「体育祭の前日に、『ちょっと』忙しいわけじゃないじゃないですか。本当は相当がんばったんでしょう？」

「あ、いや、あの、その、うーんと、まあ、ね...」

「やっぱり。そんなに疲れてるなら、無理して来てくれることなかったのに」

そう言って夏樹は微笑んだ。ぎこちなさは見えない。2人が来たことは、想像以上に効果を発揮しているらしい。陽も思わず微笑んでしまう。昨日の泣き顔が信じられなかった。今はこんなふうに笑っているのに、昨日は目から涙をこぼして泣いていた。こんなに笑顔のかわいい少女をあんなに泣かせたストーカーが、陽は許せなかった。

絶対に、捕まえてやる。そう、固く誓った。

三章

天気は快晴だった。雲ひとつない。マンガのような青空のもと、陽は忙しく走りまわっていた。

今年で19回目を迎える赤星学園の中等部・高等部合同体育祭の朝。時間は7時53分。一般の生徒は誰一人として登校していない。今ここにいるのは、高等部の本部役員と中等部の本部役員、美化・救護の担当者、それに、報道部の面々。

奈央が巨大な16チャンネルミキサーを軽々と持ち上げ、放送ブースまで運んでいく。華奢な体つきからは想像もできない力だ。1年生はあっけにと取られているが、陽達にとっては、もう見慣れたものだ。たいして驚きもしない。大地は、新聞部門の生徒を集めて、今日の役割分担などについて説明をしているようだ。その中には当然牡丹の姿もある。いつもどおり真剣な表情で、大地の話に耳を傾けている。

陽は空を見上げてみた。あいかわらず雲はひとつもない。晴れやかな秋晴れだ。ふと、昨日の夏樹の笑顔が思い出された。今日、彼女は来るだろうか。できることなら来てほしい。

花火がなった。体育祭の開催を告げる、4発の花火。近所迷惑だろうなあ、と思いつつ、音のなったほうを見やる。花火でできた小さな4つの雲は、大きく広がりながら消えていった。

「腕を上げて、のびのびと背伸びの運動から」
大地は憂鬱だった。恒例行事とは言え、体育祭の種目(と

呼べるのかどうかは別として)の中で、このラジオ体操ほど退屈なものはない。

新聞部門の主任という地位を利用し、取材と称してラジオ体操を回避しようとしたのだが、「こんなもん取材したってしょうがないだろ」という顧問の一言で台無しになってしまった。

(マジでだっりい...)

同じ主任でも、放送部門の奈央は機材運用のために本部テントの放送ブースにいる。ようするに、ラジオ体操を回避したのだ。

(なんであいつはやらなくていいんだよ)

答えは明確なのだが、心のどこかで納得できない、と言うよりは納得したくない自分があるのであった。

そんなことを考えながら本部テントをにらみつけていると、その延長線上に見知った顔が。すらりと伸ばした長い髪。お決まりのレザースタイル。手には愛車のものと思われるキー。こちらを向いている。大地と目があった。ニヤリと笑う。間違いない。

(あんのやろオ...)

性格には野郎ではないのだが、今の大地にはそんなことを考える余裕などなかった。

相手は笑顔で手を振ってきた。が、当然それに答えられるはずもなく、大地の憂鬱感はみるみるうちに頂点へ達する。

「深呼吸」

全くやる気のない深呼吸運動を終え、集合隊形に戻る。そして、ようやく解散の合図。

体育祭は始まったばかりだというのに、大地は全身を倦怠感に包まれていた。

(帰りにエ...)

いくらなんでも気が早すぎるのは自分でもわかっていたが、体が以上に重いのだ。帰りたくもなる。

大地は、ある決意を固めた。

「ちょっ、まっ、ダイチ！ストップ！」

テント裏に麻子の悲鳴が響く。後ろは壁、左右に飛べる余裕など到底なく、目の前には目を吊りあがらせた大地が立っていた。

「な、なにかあった？私、何かしたかしら？」

大地の右拳はかたく握られていた。麻子に向かって数歩近づき、右腕を振りかぶる。そして

「よっ」

パシッ、ドサッという音がして、気づいたときには大地は地面に仰向けに倒れていた。周りを見まわすと、おびえた顔の麻子と、パンパン、と気味のいい音をたてて手をはたく陽の姿がある。

「何があったか知らないけど、さすがに殴りかかるのはマズイだろ」

大地は本当に、何があったか理解できていなかった。麻子に向けて拳を振り下ろそうとした次の瞬間には、なぜか自分が倒れていた。麻子ではなくて自分が、だ。

1分ほどして、大地はようやく事の真相を理解した。ようするに、自分は陽に投げられたのだ。あの体勢では、おそらく一本背負いだろう。

(そっぴーコイツの姉キ、柔道の選手だったな)

陽の姉である望^{のぞみ}は、高校時代から県下にとどろく柔道の名選手で、陽はよく姉の練習に付き合わされていたらしい。何度となく姉に投げられてきた陽が、その投げ技

をいつのまにか修得していたとしても、何ら不思議はない。

「大地っ！」

陽の声で、大地は我に返った。仰向けに寝そべったまま、気のない返事をする。

「あー？」

「あー？じゃねえよ。いつまでそうしてる気だ」

「なんか起きあがるのが億劫おっくうでさあ」

「体育祭が始まる前から、戦意喪失か？」

「いや、なんとなくだるいんだよ」

「なんで？」

「理由？それ」

と言って、未だに寝そべったままで麻子を指差す。『それ』呼ばわりされた麻子は、当然怒る。

「『それ』ってなによ、『それ』って。しかも私、何か気に障るようなことした？」

「しなきゃここまでだるくならないですよ」

「なにお - 」

「ハイハイそこまで。大地、仕事あるんだからいい加減に起きあがって本部に行け。マコ先輩も、仕事の邪魔はしないで下さい」

それを聞いて、大地はようやく立ちあがった。服についた泥を軽く叩はたいて本部テントへと走る。麻子も、愛車のキーを指でくるくる回しながら、観客席（明確に区分けされてはいないが）のほうに歩いていった。

「マコ先輩。今日もアレックスで来たんですか？」

「...あんたさあ、ガンダムじゃないんだからそういう言い方やめなさいよ。立派に『RX-8』って名前があるんだから」

「やっぱり8ですか。僕の友達が『8よりセブンのほう

が絶対かっこいい』って言ってましたよ」

「なんだとー！？どこのどいつだ！？ここに連れてこい！」

「いや、それはちょっと…」

それだけ言って、陽は逃げるように本部へ小走りで向かう。麻子の叫び声が聞こえてきた気がしたが、全て無視する。

（こんなときにまで面倒起こしたくないいな）

グラウンドに設置された大音量スピーカーから、典型的なダンスポップサウンドが流れ出した。

（奈央め、1曲目は普通のにしとけて言ったのに…）

そこで陽は、はたと気づいた。奈央はいつもこんな曲ばかり聞いている。考えてみれば、彼女にとってはこれが『普通』なのだ。

（失敗した…）

己の不祥事を嘆きつつ、気持ちを入れ替えて部員たちに指示を出し始める。陽は、日本語は難しいと、つくづく痛感していた。

「あーっ！！夏樹ちゃん！！」

走り出した途端に、首の後ろに痛みが走る。少々重いデジカメを首から下げているのだから当然だ。それでも牡丹は全力疾走していた。夏樹がいるところまでまだ少し距離がある。牡丹の呼びかけに気づいた様子はなかった。

「夏樹ちゃん！」

ようやく夏樹のもとにたどり着いて、再度声をかける。今度こそ気づいた。

「あ、牡丹ちゃん…」

「来たんだ！来てくれたんだ！」

頼んではないのだから『来てくれたんだ』という表現はおかしいのだが、『来てほしい』と思っていたことは事実なので、自然とそう言っていた。

「うん。なんか、体育祭は、来てみようかなって...」

その夏樹の言葉を聞いているのかいないのか、牡丹はしきりに、うんうん、とうなずく。顔に、満面の笑みを浮かべて。

「お～い牡丹ちゃん、追いてくなよ...」

牡丹の突然の猛ダッシュについてこれなかったらしく、一緒に行動していた大地はかなり遅れてやってきた。それでも夏樹の姿を確認すると、

「あ、夏樹ちゃん。おとといぶり」

と、軽く挨拶を交わす。夏樹も、はい、と笑顔で答えた。

夏樹の笑顔に、暗い影はなかった。まだ立ち直ったわけではないのだろうが、それでも最初に会ったときとくらべると、かなり回復したようだ。

が、夏樹が座っていた椅子の周りに、他に椅子はなかった。

「1人、なの...？」

「...うん。私、あんまり友達いないから」

夏樹の表情が微妙にかげったのを察知して、牡丹は、しまった、と思った。しかし、すぐに気を取りなおして、つとめて明るく振舞うことにする。

「じゃあ、私達のところに来たら？瀬戸さんもいるし、一人よりはずっといいよ」

牡丹はそう提案するが、夏樹が返事をするより早く、大地が口を挟む。

「バカ言うな。一般に人間を本部に入れることなんて、できるわけないだろ」

「いやじゃないですかー。夏樹ちゃん、1人で寂しそうだし、瀬戸さんはいつも本部にいるんだから、話くらいはできますよ？絶対そのほうがいいですよ。ねー、夏樹ちゃん？」

急に話を振られ、夏樹は、え？ああ、うん...、と言葉に詰まってしまう。

「でも、みなさんに迷惑をかけるわけにはいきませんかー」

どうやら遠慮しているようである。英語で言うなら『ノーサンキュー』といったところか。

「ほらな、夏樹ちゃんもこう言ってるし」

「じゃあ、今から瀬戸さんに聞いてみます！」

もう大地先輩なんかには頼りません、といった口調で、牡丹はふくれている。

新聞部門の生徒は、無線通信機能が搭載されたヘッドセットを携帯していて、本部テントに置かれたメインサーバーを通して全て繋がっている。このシステムは陽が作ったもので、将来は通信関係の仕事につきたいを思っている彼は、数年前から簡単な無線工学などを勉強していた。因みに、陽は第2級アマチュア無線技士の資格を持っている。

「はい、本部」

牡丹の呼びかけに対して、返事をしてきたのは奈央だ。

「瀬戸さん、いる？」

「はいはい、ちょっと待ってねー」

しばらく間があいて、今度こそ陽が返事をする。

「はい、瀬戸」

「瀬戸さんですか？あの、夏樹ちゃんがいるんですけど、1人で寂しそうなので本部につれていってもいいですか？」

少し間があいて、返事が返ってきた。

「邪魔しない程度なら来てもいいけど、でも相手してる暇なんて、あんまりないよ？」

「それでも、ここにいるよりはいいと思うんですけど」

「そう？牡丹ちゃんがそう言うなら、そうしょうか。俺は出られないから、できれば連れてきてくれる？」

「わかりました！ありがとうございます！通信終わります！」

「了解」

割と短い通信を終え、牡丹は夏樹に向き直る。

「大丈夫だって！すぐに行こう！」

「本当？うれしい！ありがとう」

「そんなこといいって。早く行こ」

そう言って牡丹は、今度は大地を見た。勝ち誇ったように目を向ける。大地は「へっ」と一瞥^{いちべつ}して歩き出す。陽が許可したのなら、大地には何も文句は言えないのだ。

夏樹はそそくさと手荷物をまとめて胸に抱きかかえ、牡丹と並んで歩き出した。歩きながらも会話は弾んでいる。牡丹も夏樹も、これ以上ないくらいに笑っていた。

無線機の前に座っていた陽は、ふと振り向いた拍子に夏樹の姿を見つけると、立ちあがって駆け寄っていった。

「やあ、来たんだね」

「はい。今日は天気もいいですし、気分も良かったので来ました」

「そう。よかった」

短い会話のあと、陽は夏樹をテントに招き入れた。他の部員たちには話をつけてあるので問題はない。いくつか

ある椅子のうち、無線機のとなりにある椅子に夏樹を座らせ、陽も無線機の前に座る。

「種目は？何に出るの？」

「障害物競走です。あとは学年種目」

「じゃあ午前中は暇なんだ。どっちも午後だよな？」

「はい、そうで」

す、と夏樹が言おうとしたとき、携帯のバイブレータが震えた。夏樹の数少ない友達の1人、上山若菜かみやま わかなからのメールだ。

『隣に座ってるかっこいい男、だれ？彼氏？』

その文面を見て、夏樹の顔が、ぼっ、と赤くなる。

『ち、違うよ。友達の先輩だよ』

震える指で辛うじてそれだけ打って、送信する。動揺した心を落ち着かせようとするが、気持ちの整理がつく前にふたたび携帯が震えた。

『ホントにい～？夏樹って、案外目ざといところあるからねえ～』

頬が火照ほてっているのがはっきりと分かった。心臓の鼓動も速くなっている。

『ホントに違うんだって。友達の先輩だよ。ただそれだけ』

送信し終えたとき、ふいに陽が口を開いた。

「携帯、持ってたんだ」

「え！？あ、はい！持っていましたよ！」

完全に動揺している。手に汗が滲んでいる。胸の鼓動は高鳴るばかりだ。

「どうしたの？何かあった？」

「い、いえ、なんでもありませんっ」

あったといえばあったのだが、「恋人同士に見られてるみたいですよ」なんて言えるわけがない。

「そう？なんにもないって顔じゃないけどなァ…」
夏樹は、ギクッ、となる。その動作を、陽は見逃さなかった。

「…凶星？」

「もうっ！瀬戸さんのいじわるっ！」

顔を真っ赤に赤面させながら、夏樹はふくれている。それを見た陽は、なぜかは分からないが、ごく自然に笑みをこぼしていた。それにつられて、夏樹も笑い出す。2人はしばらく笑っていた。

と、そこに通信が入る。陽が慣れた手つきで対応する。

『2番より本部』

「こちら本部。2番どうぞ」

『400mの選手がまだ集まっていません。召集をかけてください』

「本部了解。奈央、よろしく」

「はいはい。リンちゃん、いくよー」

「オッケーです」

チャイムがなって、アナウンサーのふじもとすずね藤本鈴音が召集の原稿を読み上げる。

夏樹は一連の動作を見て、素直に驚いていた。いや、感動していた、のほうか正しいかもしれない。報道部員のチームワークは野球部のそれにも勝ると聞いたことはあったが、実際に見てみるとそれも納得できる気がした。

短い仕事を終えた陽は、ぼかん、とした顔で絶句している夏樹を見て、声をかける。

「夏樹ちゃん？どうした？」

その声でようやく我を取り戻した夏樹は、

「あ、あの、今の見てて、報道部ってすごいなあって」

「？何が？」

「えーと、チームワークが」

「チームワークねえ。そんなにたいしたもんじゃないけどね。一緒に仕事してたら、自然にこうなってたって感じ」

「それならなおさらすごいですよ。仲間意識がしっかりしてるってことですよね」

「まあ、信頼はしてるね。お互い信頼できてないと、こういう仕事はできないからね」

それはまぎれもない事実である。陽自身、3年間報道部に所属して数多の仕事をこなしてきたが、どんな仕事をするにもその根底にあったのは、仲間同士の信頼関係だった。そして、今もそれは変わらない。

「夏樹ちゃんも、俺達を信用したから頼んできたんでしょ？」

「え？ええ、そうですね…」

答えながら、夏樹は改めてそのことを思い知った。他に頼めるところがないから、というのも大きな理由であったが、その大元おもととなったのは、報道部に対する『信用』かもしれない。

「確かに、信用できないと何も頼めませんよね」

「そういうこと。俺達だって、夏樹ちゃんを信用してるから協力してるんだよ。友達だからね」

そう言われて夏樹は、はい、と微笑んだ。

自分を信じてくれてる人たちがいる。自分が信じられる人たちがいる。それは、とても素晴らしいことだ。

何より、陽は自分のことを『友達』と言ってくれた。

それが、素直にうれしかった。

昼休み。

と言っても、陽にそれらしい昼休みは与えられない。午後の種目についての打ち合わせなどを、生徒会や実行委員会と済ませなければならない。報道部長の宿命だ。

(昼飯くらい、ゆっくり食べたいよな)

弁当を本部テントまで持ってきているので、昼食はテントでとる。右手で箸を、左手で書類を持ち、視線は机の上の書類と左手の書類を行き来するという高等技術を駆使しながらも、陽はうまい具合に食事をとっていた。

「瀬戸さん！」

駆け寄ってきたのは夏樹だ。昼休みに入ってけっこう経ってはいるが、既に昼食を終えたのだとすれば早いほうだ。

「あ、お仕事ですか？」

「ん、いや、別にいいよ」

「そうですか？じゃあお邪魔します」

そう言って、夏樹は陽の隣に座る。午前中、ずっと座っていた席だ。

「部長の仕事って、やっぱり大変ですか？」

「まあね。でも、俺がやらなきゃ誰もやってくれないからさ。やるしかないんだよね」

返事をしながらも、陽の視線は書類に向かったままだ。黙々と活字に目を通してている。

今日の夏樹は、本当に暗い影を見せていない。今朝からずっと、笑ったままなのだ。

(今日1日で、だいぶ変わったみたいだな)

うれしい兆しだった。これでストーカーがすぐに捕まえられれば、全く言うことない。

(捕まえなくても、もう2度と出てこなければ、それはそれでいいんだけどな)

実際、陽は疲れていた。体育祭の準備に夏樹の件が重なって、最近の疲れがピークに達していた。

が、昨日・今日と夏樹の笑顔を見たおかげで、疲れもだいぶ癒されている気がした。

(不思議だよな)

人間はやっぱりわからない、と、いつぞやの感想を反芻^{はんすう}する。

そのとき、夏樹の携帯が震えた。メールだ。しかし、相手の名前は表示されていない。夏樹の知らない番号だった。

『ダレダヨ、ソイツ』

夏樹は一瞬、どきっ、となる。しかし、さっきも同じようなことがあったので、誰かのいたずらかと思って気に留めずに返信文を打とうとした。

しかし、その間を与えずにふたたび携帯が震える。

『ナンナンダヨ。コナイダカラズットイルヨナ』

夏樹は絶句する。指が震える。

『カレシカヨ。フザケルナ。キミニハ、ボクガイチバンナンダ』

体が動かなくなっていた。顔から血の気が失せるのが分かる。そして。

『ボクハズット、キミヲミテル』

がんっ、と頭の中で音がした。目にうつる文字の羅列が信じられなかった。しかし、それは現実にそこに存在している。

どうして

携帯が震える。恐る恐る中身を見してみる。

『ズット、ミテルカラナ』

怖い

「夏樹ちゃん！？夏樹ちゃんっ！？」

陽の声で、夏樹は我に返った。

「夏樹ちゃん？どうしたの？顔色悪いよ？」

口を開こうとする。辛うじて出た、瀬戸さん、という声は、もはや聞き取るのも困難だった。

涙をこらえきれず、夏樹は反射的に陽に飛びついていった。

「！？夏樹ちゃん！？」

さすがに陽も困惑している。が、夏樹にそんな陽の心境が分かるはずもなく。

全身が震えていた。陽もそれを感じとって、夏樹の肩に手を添える。そして、もう片方の手で優しく夏樹の髪をなでた。

「どうした？何かあったなら、遠慮なく言いなよ」

陽のやさしい口調にようやく安心したのか、夏樹は顔を上げて陽を見る。そして、手に持った携帯を手渡した。

「...！？」

陽も驚きを隠せないでいる。しばらくの間、呆然と画面に釘づけになっていた。

「どこかに、いるんだ...」

夏樹がつぶやく。

「どこかで、私のこと見てるんだ...」

恐怖に脅えきった声。

怖い

「大丈夫。僕らがついてる」

夏樹が気づくと、そこには大地と牡丹もいた。陽がいつ

の間にか連絡をとっていらしい。

「夏樹ちゃんは1人じゃないんだ。僕らが、一緒にいる」

「そうだよ。大丈夫。安心していいんだよ」

「犯人は必ず捕まえてやるさ」

安心して、いいの...？

「友達だからね」

友達...？わたしが...？

「だから、心配しないで」

ありがとう

夏樹は泣き出した。恐怖で流した涙ではない。3人の言葉を聞いて本当に安心したのだ。そして、嬉しかったのだ。

夏樹の姿を見て、3人は再度決意を新たにする。
必ず、見つけ出す。

「プログラムナンバー20、障害物競走に出場する選手は、第2入場門前に集合して下さい。繰り返します。障害物競走に出場する選手は」

夏樹はテントの中にいた。陽がつきっきりで側にいた甲斐あって、今はだいぶ落ち着いている。

(でもやっぱり、出場するのは辛いかな)

「夏樹ちゃん、もし出たくないなら、代わりの人に出て

もらうけど？」

陽がそう問いかけると、夏樹は、すっ、と立ち上がった。

「いえ、出ます。参加すれば、少し楽になるかもしれないし」

でも、と言いかけて、陽はやめた。夏樹の意志は固いらしい。目が、そう言っている。

「わかった。がんばって。応援してるから」

「ありがとうございます。いってきます」

小走りで去っていく夏樹を見送ったあと、陽は無線を飛ばす。

「本部より1番、9番」

『こちら1番。本部どうぞ』

『9番です。どうぞ』

「夏樹ちゃんが次の種目に参加する。今入場門に向かったところだ。目を離さないでくれ」

『オーケー。1番了解』

『9番了解しました』

今日何度目かになる大地と牡丹への通信を終え、陽も夏樹のほうに視線を向ける。競技中に何かがあるとは思えないが、何も無いとも言いきれない。念のためだ。

（無事に終わってくれよ）

夏樹の携帯は、陽が預かっていた。しかし、ひとつ気がかりなことが。

（預かっているときにメールが入ってきたら、やっぱり見せるべきなのかな）

夏樹の携帯は、以前陽が使っていた機種と同じものなので、使い方は分かる。メールの消去など、たやすいことだ。

（いや、やっぱりそれはマズイか）

現在は法律で『プライバシーを守る権利』が保証されて

いて、メールを消去することなどは、メールを閲覧してから行う作業なのでこれに引っかかる。陽も、通信法規として学んでいた。

（待てよ、そうしたら、見るってことも出来ないわけか。じゃあ消去する以前の問題じゃないか）

今さら気づいたか、と自分に言い聞かせる。しかし、これで疑問の結論は出た。

放っておくのだ。

（これなら問題あるまい）

バックストレッチのスタートライン脇で、号砲が鳴った。

「くやしい〜」

本部に帰ってくるなり、夏樹はそう言った。

障害物競走の第3レース、結果は僅差の2着。体ひとつほどだ。

「惜しかったね。でもがんばったね」

いろんな意味で、と、陽は胸の内では付け加える。

と、夏樹が思い出したように訪ねた。

「誰かからメールとか来ましたか？」

「いや、来てないよ。携帯は鳴ってない」

「そうですか...」

ありがとうございました、と言って、陽から携帯を受け取る。ほっ、と息をついたそのとき。

「！！」

夏樹の携帯が鳴った。メールを受信したのだ。開封してみる。

『ハシッテルスガタモカワイイネ。デモ、キミハボクダケノモノダヨ。ダレモジャマハデキナイ』

鳥肌が立った。背筋が凍るのが分かる。

「誰から？なんだって？」

夏樹は何も言わずに携帯を差し出した。文面を見た陽は、すぐに無線機のマイクに飛びついた。

「本部から1番、9番！今携帯を操作してる人間を探せ！！」

『1番了解！』

『9番了解です！！』

陽も、そばにあったカメラを手にとってレンズを覗く。ふたたび携帯が鳴った。

『デモ、ソノオトコハキニイラナイナ。キミハボクダケノモノナノニ』

どこだ？

『ドウシテフリムイテクレナインダ？』

どこにいる？

『キミトボクハウンメイノイトデツナガッテルンダヨ』

出て来い！姿をあらわせ！！

『サア、ボクノトコロニオイデ』

『見つけたっ！！』

無線機のスピーカーが叫んだ。声の主は大地だ。

「どこだ！？」

『3コーナーと4コーナーの中間点の延長上だ！黒のコートにジーパンはいてる！』

「写真は撮ったか!？」

『もちろんだ! そっちからも早く!!』

陽も慌ててカメラを向ける。しかし。

「あ...」

『どっか行っちゃった...』

「牡丹ちゃん、写真は撮れた？」

『撮れました。何枚かピンぼけしてるかもしれないですけど、大丈夫だと思います』

「大地、ヤツの行方は？」

『校舎の裏に隠れたな。それ以上は分からない』

「そうか...。よし、放課後写真を現像しよう。部室にM Oを持ってきてくれ」

『1番了解』

『9番了解しました』

通信を切断し、陽は夏樹に向き直る。

「聞いてのとおおりだ。犯人の顔はバッチリ撮れたはずだ。あとは時間の問題だよ」

当の夏樹は、あまりの急展開に頭の中で整理が出来ていないようだ。

「え、ええっと...？」

「犯人の顔は写真に撮れたはずだから、あとは聞き込みでいけると思う。明日休みだから、早ければ明日にも見つかるよ」

「あ、ありがとうございます！」

未だにやや混乱がみだったが、それでも解決へ大きく前進したことは分かった。

「本当に、ありがとうございます...」

夏樹は、安心したのか座りこんでしまった。目には、まとも涙が浮かんでいる。

(もう、何回泣いたかわかんないや)

夏樹は下を向いていた。陽に涙を見られたくなかった。
なんというか、恥ずかしかったのだ。

(今さら、だけどね)

秋の涼しげな風が、夏樹の濡れた頬をなでていった。

四章

夏樹の自宅の近所に住んでいる。妻子はいない。仕事は画家。おもに人物画を描く。名前は、須田^{すだ たけお}武夫。

半日の聞き込みで得た情報だ。意外と近所に知られている人物らしく、写真を見せただけで次々と情報が手に入った。

「正直、驚いたな。たった半日でこんなに情報が入るとは思わなかった」

「そうですね。おかげで調査は楽ですけどね」

「この辺じゃ有名人なのかもな。と、このあたりじゃねえか？ほら」

大地が指差した電柱には、住所表示の入った看板がくくりつけられている。その住所は、陽達が手に入れた須田の住所と一致していた。

「探してみるか。画家だったら家にいるだろう。すぐにつかまるはずだ」

「どうする？別れるか？」

「一緒のほうがいいんじゃないですか？別班を呼び出す時間をなくなりますし」

「固まって行動しよう。効率は落ちるが、逃がす可能性は減る」

「オーケー、わかった。...夏樹ちゃん、どうした？さっきから何も言わないけど」

そう、夏樹は先ほどから一言もしゃべっていなかった。表情が引きつっている。

「ちょっと...緊張っていうか...」

「何も緊張することなんかないよ。私達だっているんだし、何も恐いことなんかないよ」

「う、うん...ありがとう、牡丹ちゃん」

そうは言ったものの、夏樹の表情は未だに引きつっている。

「まあ、見つければどうにかなるだろう。とりあえずヤツを見つけ出すのが先だ」

3人はうなずいて、歩き出した。陽は通りの右を、大地と牡丹は左を見る。

10分ほど歩いて電柱の住所表示が変わったのだが、

「須田」という表札は見つからなかった。

「おかしい...」

「なんでねえんだ？」

「変ですねえ...」

陽は、少々離れたところで掃除をしている初老の男に聞いてみることにした。

「あの、すみません。このあたりに『須田』さんっていう方がいらっしゃるはずなんですが」

「ん？ああ、いるよ。あ、兄さん達、家が見つからなくて困っとるんじゃろ」

「ええ、そうなんです」

「そうじゃろうな。あの人の家には『須田』という表札はついておらん」

「へ？」

「『^{たくぼ}田窪』という表札がなかったかな？彼はそこに住んでるんじゃ。前のオーナーの表札がそのまま残っとるんじゃよ」

「ああ、そうなんですか。どうもありがとうございます」

「いいや、なんの。がんばりなされ」

「はい。失礼します」

何が『がんばりなされ』なのかよくわからなかったが、とりあえず3人に、「田窪」という表札を探すように指

示する。すると、

「田窪？あれですか？」

牡丹が指差した先には「田窪」と書かれた、薄汚れた表札があった。大地が、ガックリと肩を落とす。

「近いな、オイ...」

「目の前にいて『見つからない』なんて言ってたのか...」
自分で言って、陽は情けなくなる。

（ま、見つかったからいいか）

「よし、行こうか」

陽は呼び鈴を押した。

「私立赤星学園報道部？」

須田は陽が差し出した名刺(のようなもの)を見て、怪訝^{けげん}な顔をした。

「ご存知ないですか？これでも千葉県内では割と有名な
んですが」

「ふーん...」

須田は、全く興味なし、といった感じだ

「で、その報道部さんが、俺になんの用だい？」

「彼女に見覚えはありませんか？」

陽は視線だけで夏樹を示す。須田はしばらく夏樹を見たあと、言った。

「いや、知らないね」

「またまた、とぼけちゃって」

陽が、須田を嘲^{あざけ}るような口ぶりで言う。

「いや、本当に知らないね。誰なんだい、この子は？」

「そうですか。あくまでとぼけるんですか」

「とぼけてるんじゃないよ。本当に知らないんだ」

陽は呆れた様子で、首を横に振る。

「これでも、まだとぼけるつもりですか？」

写真を差し出す。体育祭の時の写真だ。

須田の表情が明らかに変化した。

「な、なんだ、この写真は？」

「何を言ってるんですか。あなたですよ」

「これがどうしたっていうんだ。俺は何も知らないぞ」

「何も、知らない？」

「そうだ！名前はおるか、携帯の番号なんて知るわけがない！」

「携帯の番号？なぜそんな言葉が出てくるんです？」

「な...？」

「僕は携帯の番号なんて一言も口にしていない。それなのにどうしてそんなことを言い出すんですか？」

「そ、それは...」

「簡単なことです。あなたが彼女の携帯番号を知っているからだ」

「...」

「違いますか？」

「...^{はか}謀ったな...」

「失礼な。あなたが勝手に言い出ただけですよ」

須田は、それ以上は何も言わなかった。沈黙が流れる。

数分は経過したかと思われたとき、須田が口を開いた。

「知ってて、何が悪い」

「はい？」

「俺はな、この子をモデルに絵を描きたかっただけなんだ。その何が悪い」

「認めるんですね、ストーカー行為を」

「ストーカー？ストーカーなんかしてないさ。この子に近づいただけだ」

「その近づき方が問題なんですよ」

「何...？」

「ストーカー規正法を知ってますね？」

「...聞いたことはある」

「ある一定の継続的な行為によって特定の人物が精神的・肉体的被害を負った場合、その原因となった人物は刑事裁判にかけられるんですよ」

「それが、何か？」

「彼女は、精神的な苦痛を味わいました。その原因は、あなたです」

「...！！」

「彼女が訴えれば、あなたを法廷で裁くことができます。そうなった場合、まあ有罪は確定でしょうね。こちらにはきちんとした証拠もありますから」

「ふざけるな！！俺は犯罪なんか犯しちゃいない！！俺は何も悪いことはやっちゃいないぞ！！」

「いいかげんにしてください！！！」

突然、それまで黙りこくっていた夏樹が大声で叫んだ。

「どうしてそんなことが言えるんですか？あなたには私の味わった苦しみはわからないと思いますよ。でも、それをこうして訴えてるのに、どうしてあなたはそうやって平然とかまえていられるんですか！！」

今度は、須田が黙りこんでしまった。

「あなたは男だからこんなことはないでしょうけど、でもやられたほうはすごく辛いんです。帰り道が恐くなって、学校に行くのが嫌になって、そのうち全く外出できなくなるんです。この苦しみがわかりますか！！！」

言いたいことを一気にまくしたてて、夏樹は泣き出してしまふ。牡丹がそれをなだめる。大地が口を開いた。

「須田さんよう、この子をモデルにしたいと思うのはか

まわらない。よりよい人物画を描きたいと思うのは自然なことだと思うよ。でもさ、だからって何してもいいってワケじゃないんだぜ」

「好きだからって、何をやっても許されると思ったら大間違いですよ。どんな事情があれ、あなたがしたことは犯罪なんです」

陽が言う。

「彼女に、謝っていただけますか？」

陽の問いかけに、須田は黙ってうなずいた。そして。

「...すまなかった」

ただ一言、そう言った。

「ありがとうございます。それから、もうひとつ」

須田が、何事か、と顔を上げる。

「分かてるとは思いますが、もう2度とこんなことはしないと約束して下さい」

「...ああ。約束する。本当にすまなかった」

その言葉を最後まで聞いて、陽は立ち上がった。

「行こうか」

3人も立ち上がった。そして玄関のほうへ歩いて行く。

「須田さん」

陽が振り向いて言った。

「いい絵を、描いてくださいね」

陽は今度こそ玄関に向かって歩き出した。

「なんか、意外と聞き分けのいい人でしたね」

「そおかあ？最初のほうは全然とぼけてたじゃん。聞き分けがいいわけじゃないだろ」

「でもまあ、一応解決したんだよな。よかった」

「もう、一人で帰れるね。夏樹ちゃん」

「うん。みなさん、本当にありがとうございました」

夏樹は、深々と頭を下げた。

3人は不思議な人たちだ、と夏樹は思う。ときには楽しく、ときには優しく、またときには感情をストレートに出して怒ったりする。

そして何より、3人の間は「報道部の仲間」以上の絆で結ばれているような気がした。

（ちょっと、うらやましいな）

でも、陽も牡丹も大地も、自分を「友達だ」と言ってくれた。短い間だったのに、何度も何度も言ってくれた。

（友達って、やっぱりいいな）

空は蒼く晴れ渡っている。冬の訪れを告げる冷たい風が、夏樹の髪を揺らしていた。

終章

「あ、いたいた。ぶちょおー」

3年D組の教室に、奈央が小走りで入ってきた。陽は、読んでいた文庫本から目を離す。

「体育祭の反省会、いつにする？今日でいい？」

「みんなの都合がつけばな。できるだけ早いほうがいいし。今日明日くらいにはやっちゃおう」

「はーい、りょおかーい」

相変わらず業務連絡の会話は短い。

奈央は、陽が持っている文庫本のカバーを見やった。

「ぶちょ -、まだこれ使ってるの？そろそろやめなの？」

「そうだな。そろそろ飽きてきたな」

「でしょ？やっぱ他のに変えなよ」

「そうしよう。今度武田に頼んでおこう」

「だーかーらー」

「ん？どうした？」

「いや、なんでもない」

そのとき、教室のドアから奈央が、いや、牡丹が入ってきた。よく似た姉妹である。

「あ、お姉ちゃん、来てたんだ」

「まーね。どしたの？こんなとこで何してんの？」

「瀬戸さんに用があるんだよ。瀬戸さん、夏樹ちゃん、ちゃんと帰れるようになったみたいです」

「へえ、そう。それはよかった」

「夏樹ちゃんって、安達夏樹？」

「そうだよ。お姉ちゃん、知ってるの？」

「んー、聞いたことあるだけ。中学から続いていた無遅刻無欠席無早退記録が途切れたってときに」

「あー、あれは惜しかったね。でも、しょうがないかも」

「え？どうして？」

「んーん、なんでもない」

「なんなのよ？ぶちょ - 、何か知ってる？」

「いーや、俺は何も知らないよ」

「二人そろって、一体何隠してんのよ？教えなさいよ」

「「ないしょー」」

「なにおー」

でも、これは本当に言えないよな、と陽は思う。

なにせよ、夏樹が立ち直ってくれたのならそれでいい。「終わりよければ全てよし」だ。

(やっぱり、笑ってるのが1番だしな)

窓から入ってくる風に、思わずプレザーの前をかきあわせる。冬はもうすぐそこまで迫っていた。

私立赤星学園報道部 E N D

あとがき

あきらめない明日を　そして、振り向かない昨日を

はじめまして、の方がほとんどだと思います。今回3年ぶりの執筆となります、^{かざなぎ しんと}風籬真人です。

ご覧の通り、少々ミステリーチックになってしまいました。いや、最初はこんなはずじゃなかったんですよ？おかしいですねえ。

報道部という舞台は、僕が約8年間経験してきた放送関係の仕事をモデルにしています。小学校5年から高校卒業までですから、ずいぶん長いものです。これも、好きでやってるからこそなせるワザなのですが。

しかしまあ、3年間のブランクというのは恐ろしいもので、たかが60ページ弱の作品に1ヶ月以上の期間を要しました。超遅筆。申し訳ございません。

作中で、たまに1人称視点に転換するのは、僕が愛読している某作家様の影響です。新作が待ち遠しいです、ハイ。

今作では、友人である^{きさらぎ}如月氏にイラストをお願いしました。が、これを書いている時点では上がってません。でもまあ、がんばって描いてくださるでしょう。期待しますぞ。

末筆になりましたが、刊行に際してイラストレーションを引き受けてくださった^{ゆい}如月由維様、そして、この本を読んでくださった全ての皆様に、深く感謝致します。

2001年 秋

風籬 真人

SPECIAL THANKS

如月 由維

(C) SHINTO KAZANAGI,
YUY KISARAGI
PRINTED IN JAPAN